ウィリアム・ワーズワスによる『アエネーイス』翻訳詩（1 巻序歌）
― 解題、和訳および注釈 ―

高畑 時子*、子安 加奈子**

William Wordsworth's Translation of Virgil's *Aeneis* (I. 1-63), with Japanese Translation and Commentary

Tokiko TAKAHATA* and Kanako KOYASU**

The purpose of this paper is to examine the beginning part of *Aeneid,* William Wordsworth's translation of Virgil's *Aeneis*. Although many studies have been conducted on Wordsworth's Romantic poetry, which has been both popularly and critically acclaimed, less attention has been paid to his ardent attempt at translating the classical verse he so adored.

Accordingly, in the treatise, an attempt has been made to translate the Wordsworth's *Aeneid* I (I. 1-63) into Japanese. This includes not only the Japanese translation but also some commentary on the work. These commentaries mainly include analyses of vital keywords or concepts within the work, such as *pietas* and *fatum / fata.*

As his literary friend Samuel Taylor Coleridge had anticipated, the course of this attempt did not run smooth. Wordsworth's determination to convey both the meaning and euphony of Virgil's passages more faithfully than ever ―in order to reproduce the pleasing experience of appreciating the world and words of the Latin work in English― caused him to struggle and be perplexed by the tension between preserving the exactness of the content and simulating the form, as well as to realize the still further difficulty of rendering them aesthetically pleasing. He also fell into a contradiction by excessively adopting phrases from previous translators such as John Dryden and Christopher Pitt, while expressing the strong urge to exceed their translations by aiming for originality.

Yet, in his struggle to produce the translation, we can still trace his own poetic talent and ingenuity. For that reason, it would be valuable to analyze his method of translating the ancient Roman masterpiece into English, which reflects not only his admiration for classical literature but also his spirit as an English poet of the Romantic period.

Keywords: Translation analysis of Wordsworth's *Aeneid*,　Poem translation into English

I. 解　題

本稿は、英国のロマン派の詩人ウィリアム・ワーズワス (William Wordsworth, 1770-1850 年) によって手掛けられた、『アエネーイス』(*Aeneis*) 翻訳詩 1 巻序歌部分の訳出と考察を試みるものである。『アエネーイス』は、ローマの詩人ウェルギリウス (Publius Vergilius Maro, 前 70-前 19 年) による壮大な叙事詩で、トロイア陥落の後、流浪を重ねる主人公が、数々の受難と苦闘の末にローマ建国の礎を築くまでを歌い上げる西洋古典文学の傑作である。

これまで、ワーズワスの『アエネーイス』訳詩は本格的

*近畿大学工業高等専門学校
総合システム工学科共通教育科
**京都府立医科大学医学部非常勤講師

な研究対象としてはあまり採り上げられず、出版された注釈も、管見では非常に少ない。その原因の一つとして考えられるのは、ワーズワス自身もまず冒頭で、ドライデン (John Dryden, 1631-1700 年) とピット (Christopher Pitt, 1699-1748 年) による先行訳の影響を断らざるを得なかったように、[1] 人口に膾炙していたドライデン訳の存在感が、あまりにも大き過ぎたことである。ドライデン訳をもピット訳をも超えて、ウェルギリウスのラテン語原詩を読むのと同じ体験と感動を英詩で再現しようという意気込み [2] で始められたものの、結局は原作が全 12 巻のところを 3 巻で断念、しかも第 1 巻最後のほんの断片のみが、部数の少ない短命の古典関連学術誌 (*The Philological Museum,* 1832 年) に掲載された以外は、生前に発表されることのなかったこの翻訳詩が、その後も長い間、日の目を見ることがなかったのは致し方ないことであろう。

けれども、ロマン派の盟友コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834 年) に強く反対されようとも、[3] ワーズワスがかなりの情熱と時間をかけて訳詩の推敲を重ねたことも事実である。[4] 時には出来栄えに対する強烈な自負をも垣間見せ、時には自らの能力の限界に打ちのめされつつ彼が全力を注いだこの作品を、一般に人気と評価の高い彼の全盛期のロマン派的詩作に比べて完成度やインパクトに欠けるという理由だけで、軽視するわけにはいかない。

幸い、現在では、コーネル版ワーズワス著作集の一環として刊行された『チョーサーとヴァージルの翻訳』(*Translations of Chaucer and Virgil*) において、学術的承認を受けた決定稿と、ワーズワスの推敲と苦心の跡を辿ることができる自筆草稿の両方が公開されている。本稿ではこのコーネル版を底本とし、ワーズワスによる『アエネーイス』英訳詩 1 巻 1-63 行とウェルギリウスのラテン語原典を、ドライデンとピットの英訳詩とも訳注にて比較分析しつつ、[5] 詳細に解読していくことを試みる。訳出に当たり、ラテン原文と英訳詩を比較検討しやすくするため、交互に原文と訳詩を配置した。第 1 巻の翻訳を終えた後にもなお、「ウェルギリウスを原文で読む時は感動するというのに、翻訳にはそれほど心動かされることはない」(*Letters* IV [235]) と記し、そういった欠陥を補おうと試みた自分の翻訳の出来栄えについての自信を見せていたワーズワスの英訳詩を吟味する際に、ラテン語原詩と比較するのは必須と考えるからである。

II. 和訳と注釈

ウェルギリウス『アエネーイス』試訳 [6]

Vergilius, *Aeneis* (I.1-7)

Arma uirumque cano, Troiae qui primus ab oris
戦いと勇者を私は謳う。彼こそは、トロイアの海岸から、
Italiam fato profugus Lauiniaque uenit
イータリアへ運命ゆえに逃れ、
そして、ラーウィーニウムの岸辺へ、
litora, multum ille et terris iactatus et alto
初めて辿り着いた者であった。
この者こそ、陸でも海でも神々の御業により、
ui superum, saeuae memorem Iunonis ob iram,
ひどく苛まれた。厳しいユーノーの、執念深い怒りゆえ、
multa quoque et bello passus, dum conderet urbem
戦争でも、数多くの艱難辛苦を耐え忍んだ末、
遂に都を建設し、
inferretque deos Latio; genus unde Latinum
ラティウムへ祖神たちを 遷(うつ) したのであった。
その地から生じたのが、ラティウムの民、
Albanique patres atque altae moenia Romae.
アルバの町の、父祖たちと、そびえ立つローマの城壁。

ワーズワス英訳詩『アエネーイス (イーニド)』試訳

Wordsworth, *Aeneid* (1) (I. 1-9)

Arms, and the Man I sing, the first who bore
戦いと勇者を、私は謳う。(2) 最初に、
His course to Latium from the Trojan shore,
トロイの岸辺から、レィシァムへの途を、辿った者を。(3)
A Fugitive of Fate: — long time was He
運命のさすらいびと (4)— 長きに渡り、この者は、
By Powers celestial toss'd on land and sea,
天の御業により、陸と海で、翻弄された。
Through wrathful Juno's far-famed enmity;
怒り狂ったジューノーの、世に知られた、
憎しみにより、(5)
Much, too, from war endured; till new abodes
戦 争でも、多くの艱難辛苦を耐え忍び、
遂に新たな安住の地を、
He planted, and in Latium fix'd his Gods;
彼は定めた。そしてレィシァムの地に、
自身の神々を据えた。
Whence flowed the Latin People; whence have come
その地から生じたのが、ラテンの民。
その地から出でたのが、
The Alban Sires, and Walls of lofty Rome.
アルバの町の父祖たち、(6) そして、
そびえ立つローマの城壁。(7)

注 釈

(1) 原作のタイトルは、Aeneis (アエネーイス)、つまり

「Aeneas (アエネーアース) の物語」だが、英語圏では通例、物語名は *Aeneid*, 主人公の名にはラテン語と同じ綴りの Aeneas が使用される。発音は、“Ae” の部分が [ɪ] または [i:]と、ラテン語とは大きく異なり、カナ表記にすると「イーニド (またはイニード)」、「イーニアス (またはイニーアス)」が近いものとなる。

コーネル版『チョーサーとヴァージルの翻訳』の編者であり、いち早くワーズワスの『アエネーイス』翻訳に着目していた Bruce E. Graver は、偉大な詩の力は内容だけではなく言葉そのものにも内在すると考えたワーズワスが、ウェルギリウス原詩の「音のパターンや統語、リズム、アイデアのすべてを模倣しようとした」[7] ことを指摘しているが、重要な固有名詞の発音がこのように違うことは、音感を重視するワーズワスにとって、頭の痛い問題であったであろう。その事情を鑑み、本稿では固有名詞の訳出にあたり、原則としてそれぞれの言語の読みを採用するが、原作と英訳の比較考察の際の煩雑さを避けるため、本文中で物語名と主人公名に言及する際は、日本で普及しているラテン語読みの『アエネーイス』と「アエネーアース」で統一する。

(2) “Arms, and the Man I sing” (I. 1) という訳文は、ラテン語の通常の語順を保ったままの逐語訳で、“Arms” という語彙も含めてきわめてラテン文的であるが、英文としては倒置法により “Arms” と “the Man” が強調され、印象的な出だしとなっている。ラテン語の表現をそのまま再現しつつ、英文としても成功しているこの歌い出しは、ドライデン、ピットと引き継がれてきたものであるが、ワーズワスもそのまま踏襲している。

(3) 原詩の「ラーウィーニウム」は、ラティウム地方の一都市であるが、後にアエネーアースが建設するため、彼が到着した時点では、その地はまだラーウィーニウムではない。時間的に後に起こる事象の予期的表示 (prolepsis) は古典詩によく見られる手法であるが、英訳詩では、時間軸通りにLatium (綴りは同じだが、英語の発音はラティウムではなくレィシァム [léiʃəm] となる) という地名が用いられている。予期的表示については、Ruæus, *P. Virgilii Maronis opera interpretatione et notis* [189] 参照。ドライデンが利用した、このDelphineシリーズのRuaeus (Charles de la Rue, 1643-1725年) による注釈を、ワーズワスも参照したという。ラテン語で書かれた注釈書に関しては、これに加え、Minellius (Jan Minel, 1625-1683年) による*Publii Virgilii Maronis opera omnia*も所有していたことが判明している (Graver, Introduction [157]).

また、最初の二行連句 (couplet) は、ワーズワスが前書きでも語っているように、ピットの訳文をそのまま拝借している (注釈 (2) で見たように “Arms, and the Man I sing” の部分はドライデンとも共通)。ドライデンとピットを超える訳を、世に問うことを目指したワーズワスが、大事な冒頭部分に彼らの訳文をそのまま据えてしまった理由の一つには、この見事な逐語訳に代わる訳を捻出するのが、実際問題として困難であったこともあろう。けれども結果としてこの借用は、あたかも和歌の本歌取りのように、慣れ親しまれた先行訳のフレーズから読み手を引き込んでいく効果的な導入となっている。

(4) 原文の “profugus” に関しては、ドライデンとピットが受動的に訳しているものの、名詞化されたと解釈することも可能で、ワーズワスのように名詞に訳すことは文法的逸脱とはならないが、“fato” は「運命、定め」(fatum) の奪格、つまり「運命によって」となるので、ドライデンの “by fate,… Expell’d and exil’d” (I. 1-3) や、ピットの “By Fate expell’d” (I. 3) という訳の方が原文に忠実である。逐語訳を旨とするはずのワーズワスはここでは敢えて、“A Fugitive of Fate”「運命のさすらい人」(I. 3) という印象的な名詞表現を用いている。「戦いと勇者」で始まるウェルギリウスの『アエネーイス』に関して、歌い出しの名詞で主題を明示するという叙事詩の慣習通りであることが指摘されるが (Anderson [6])、借用二行連句が終わった直後、ワーズワス自身の歌い出しともいえる位置に目を引く形で据えられた “A Fugitive of Fate” も、彼自身の主題を明示するとともに、詩の幕開けを印象的に演出する効果を上げている。

(5) ジューノー (Juno) は、ローマ神話のユーノー (Iuno) の英語名で、最高神ユッピテル (Iuppiter 英語名 Jupiter, Jove) の妻。トロイア (Troia 英語名 Troy) に強い反感を抱いていた。また、原詩の “memorem”「執念深い」「(いつまでも) 覚えている」は、本来はユーノーの属性でありながら “iram”「怒り」の形容語として用いたいわゆる代換法 (hypallage) だが、ワーズワスはこのような古典的修辞を用いず、“far-famed”「世に知られた」と憎しみや怒りを形容しても不自然ではない語に変更している。

(6) アルバは、主人公アエネーアース の息子アスカニウス (Ascanius) が父の死後に創建したとされるローマの母市で、ラティウムにある。その王族の子孫からローマの建国者ロームルス (Romulus) が出た。よってアルバ人はローマ人の父祖ということになる。

(7) 原詩の “altae moenia Romae” (I. 7) を、ドライデンが

"the long glories of majestic Rome." (I. 10) と比喩的に意訳し、その後に続く偉大なローマ帝国の歴史の時間的な長さを強調したのに対して、ワーズワスの "Walls of lofty Rome" (I. 9) という訳は、オゥグルビーの逐語訳 "Romes lofty walls" [106] の形容語と、形容詞を城壁ではなくローマ自体を修飾する位置に移したトラップの "the walls of Tow'ring Rome" (I. 7-8) の折衷案ではあるが、軍事力で空間的拡大を続けたローマ帝国の威容を視覚化するものとしての城壁の光景を思い浮かばせる。

Vergilius, *Aeneis* (I. 8-11)

Musa, mihi causas memora, quo numine laeso
ムーサよ、私に理由を語り給え。
神々の女王がいかなるご神威を傷つけられ、
quidue dolens regina deum tot uoluere casus
何を、お怒りになり、かくも多くの危険に、
insignem pietate uirum, tot adire labores
敬神の心に優れた勇者が臨み、
かくも多くの苦難を、蒙るよう、
impulerit. tantaene animis caelestibus irae?
駆り立てたのか。天の御心に、
これほど激しいお怒りが生じたのか。

Wordsworth, *Aeneid* (I. 10-14)

Say, Muse, what Powers were wrong'd, what grievance drove
語り給え、ミューズよ、いかなるご神威が傷つけられ、
いかなる憤懣が駆り立てたのか、
To such extremity the Spouse of Jove,
そのような狼藉へと、ジョゥブの妻ともあろう、
お方を。(8)
Labouring to wrap in perils, to astound
(その方が) 危難で囲い込んで、禍で驚かせようと、
精を出す、(9)
With woes, a Man for piety renown'd!
敬神で、(10) 名高い、一人の勇者を。
In heavenly breasts is such resentment found?
天の御胸に、そのような怨嗟が、見出されるのか。

注 釈

(8) 原文の "regina deum" (I. 9) について、ドライデンが "For what offense the Queen of Heav'n began" (I. 13)と訳しているのに対して、ワーズワスは "the Spouse of Jove"「ジョゥブの妻」と表現を変え、前行の "drove" と韻を踏むようにしている。ワーズワスは、二行連句 (couplet) を基本として時折三行連句 (triplet) が混ざるというドライデンと同じ脚韻形式を用いているものの、出来る限りドライデンとは違う語で脚韻を整えようと努力している痕跡が随所に見られる。(ドライデンは行末のbeganと次行のmanで脚韻。)

ワーズワスは、韻律についても、ドライデンと同じ弱強五歩格 (iambic pentameter) を用いており、これは、ウェルギリウスの『アエネーイス』原詩をはじめとする古典に見られる長短短六歩格 (dactylic hexameter) の叙事詩を英詩に移し替えようとした先達詩人たちの試行錯誤の末、[8] 17世紀以降、最も多用されるようになった形であるが、弱強五歩格の二行連句、すなわち英雄詩体二行連句 (heroic couplet) といえば、ドライデンによって完成の域に達したと言われる詩型である。結果としてワーズワスはドライデンの代名詞ともいえる型に、ドライデンとは違う表現を嵌め込んで、ドライデンを超えなくてはならないという困難な試みに自らを追い込んでしまったことにもなる。しかも、忠実な翻訳を試みる者が直面する苦労は、オウィディウス『書簡集』の序文において、ドライデンも指摘するところである。

> 「逐語的に、かつ上手く訳すというのは殆ど不可能である。何故ならラテン語 (非常に簡素で簡潔な言語) はしばしば一語で、近代語の粗雑さや偏狭さが伝えきれない様々な意味を表現する。[...] 要するに、逐語的に写す者は直ちにあまりに多くの困難に苦しめられるがゆえに、自らをすべてから解放することは決して出来ない。彼は、同時に著者の思想と言葉を考慮し、別の言語でそれぞれに対応するものを見つけ出さねばならない。これに加え、彼は韻律の限界と脚韻の苦役に自らを縛ることになる。これは両足に枷をはめられた状態で綱の上で踊るようなものだ。用心すれば落下は避けられるかもしれないが、動きの優雅さは期待できない。」("Preface to Ovid's Epistles" [385-386])

上記の一節は、ドライデンが自らの「ゆとりある翻訳」"translation with latitude" [384] の立場を擁護するための対立項として極論化された逐語訳批判であり、厳密な逐語訳というよりは原詩の素晴らしさを忠実に再現することを目指したワーズワスに単純にあてはめるわけにはいかないものの、ラテン詩を英詩に翻訳する誰もが (そこにはワーズワスのみならずドライデンも含まれる) 多かれ少なかれ直面する苦労を言い当てているといえるだろう。ワーズワスとて、この困難を予想していなかったとは考えにくい。以前にラテン詩の英訳に取り込んだ経験もある彼は、多少の困難は織

り込み済みで、それでも、ドライデンの言葉を借りれば、「綱の上で優雅に踊れる」自信があったからこそ、翻訳に乗り出したのであろう。

(9) ドライデンとピットが "labores" をそれぞれ "cares," "toils" と訳しているのに対し、ワーズワスは "Labouring to […]" と、品詞を変えながらも、原文の "labores" の語感をうまく残す工夫を行っている。

(10) 原文の "pietas" (I. 10) (ここでは pietate と格変化した形) は、神々への崇敬のみならず、親・祖先・民族・国（共同体）への忠孝、家族はもとより同胞・配下の者をも含む一族郎党すべてに対する義務と愛情、配慮などを重んずるローマ的美徳である。"[T]he word in Latin is more full than it can possibly be exprest in any Modern Language; for there it comprehends not only Devotion to the Gods, but Filial Love and tender Affection to Relations of all sorts." [235-236] とドライデンも『アエネーイス』翻訳詩の献辞で指摘するように、あまりに包括的であるため正確に近代語に訳すことが難しい語である。「神に対する、国に対する、血縁に対する人間の義務全て」"the whole Duty of Man towards the Gods, towards his Country, and towards his Relations" [238] を、一語で包含する語を訳すことの難しさを認識していたドライデンは、アエネーアースの第一属性として多用されるこの語を、状況に応じて訳し分けることが多く、ここでは "so brave, so just a Man!" (I. 14) と武勇に関する美徳の概念語で言い換えると同時に、原詩ではアエネーアースが立ち向かうのは "tot…labores" (I. 10) となっているところを、"Wars" (I. 16) と限定して訳している。

それに対して、"a Man for piety renown'd" (I. 13) と同系語を用いるワーズワスの訳文は、オゥグルビーの先行訳 ("a Prince for Piety renown'd" [166]) に酷似してはいるものの、勇壮な演説や戦いの場面を朗々と歌い上げることで評価の高いドライデン訳と、敬虔や友愛、憐憫や哀感といった細やかな心の機微の描写で本領を発揮するワーズワス訳の焦点の違いを如実に表す。例えば、ドライデンとワーズワスの違いを特徴的に表わす箇所として言及される場面の一つに、アエネーアースの演説がある (cf. Spiegelman [100-101]). "Endure, and conquer" (I. 277) と堂々とした命令口調で部下たちを鼓舞するドライデンのアエネーアースに対し、ワーズワスのアエネーアースは、原文通り、部下たちに "O Friends" (I. 266) と呼びかけ、自身の内にある恐れや不安を抑えて、彼らを励まそうと努力する。

ただし、同系語とはいえ、キリスト教的色彩の濃い 19 世紀イギリスにおける "piety"「敬虔」は、武勇から敬神、友愛までローマ的美徳の一切合切を包摂していた "pietas" と全く同じものではない。かつては外界とのあらゆる関係を示していたこの語は、時代の流れと共に内なる方向へと進み、親への "pietas" は父なる神に向けられて宗教の領域に限定され、公的な部分に関しても、もはや "piety" という訳語では説明することが出来ず、"public engagement" や "social responsibility" といった別の道徳的用語を使わなければならなくなったという変化 (Garrison [255]) を考慮しなくてはならない。別の語に訳し変えることが、時の流れの中で抜け落ちた要素に着目することであれば、同系語を使うということは、内的変質を遂げながらも残り続けた要素に焦点を当てることになるといえよう。

その一方で、大学在学中に既にウェルギリウスの『農耕詩』(*Georgica*) の翻訳を試みるなど古典の素養のあったワーズワスの訳語を、「宗教的敬虔」という狭い意味範囲だけに区切るべきではないとも考える。彼の訳詩に頻出する "piety" や "pious" という語の使い方から見ても、19 世紀の読者の価値観においても美徳の範疇に入る範囲であれば、柔軟に "pietas" 本来の意味の一部をも表わし得るものとして使用されていると捉えるのが妥当であろう。

Vergilius, *Aeneis* (I. 12-18)

Vrbs antiqua fuit (Tyrii tenuere coloni)
古の都があった。テュルスからの植民者らが、
入植しており、
Karthago, Italiam contra Tiberinaque longe
カルターゴーといった。イータリアの対岸、
ティベリス河の河口のはるか向こうにあり、
ostia, diues opum studiisque asperrima belli,
財に富み、戦意においても、比類なく毅然としていた。(11)
quam Iuno fertur terris magis omnibus unam
この都一つをユーノーは、あらゆる地にも増して、
サモス島をも差し置き、(12)
posthabita coluisse Samo. hic illius arma,
一層寵愛したといわれている。ここには、彼女の武具が、
hic currus fuit; hoc regnum dea gentibus esse,
ここには、戦車があった。女神は運命が許す限りは、
この都を諸民族の王としようと、
si qua fata sinant, iam tum tenditque fouetque.
当時すでに、ねらいを定め、心に抱いていた。

Wordsworth, *Aeneid* (I. 15-24)

Right opposite the Italian Coast there stood

イタリアの、海岸のちょうど対岸に、あったのは、
An ancient City, far from Tiber's flood,
ある古の街。タィバー河 (13) から、はるか遠く、
Carthage its name; a Colony of Tyre,
その名を、カーセッジ (14) と、いい、
タィァー (15) の植民地であった。
Rich, strong, and bent on war with fierce desire.
豊饒で、強く、激しい野望に燃えて戦いに熱中していた。
No region, not even Samos, was so graced
いかなる地域も、セィモス島 (16) さえも、それほどまでに、
By Juno's favour; here her Arms were placed,
ジューノーの寵愛に浴することはなかった。
ここには、彼女の武具が置かれ、
Here lodged her Chariot; and unbounded scope,
ここには、彼女の戦車もあった。
そして限りなく大きな野望。
Even then, the Goddess gave to partial hope;
当時すでに、この女神は、偏頗な野望に駆られていた。
Her aim (if Fate such triumph will allow)
彼女の目的とは、
(もし運命が、そのような勝利を許すなら)、
That to this Nation all the world shall bow.
この国家に、全世界が、服従することであった。

注 釈

(11) "studiisque asperrima belli" は、訳者や注釈者によって解釈が分かれている。岡・高橋訳は「戦争に明け暮れ荒んでいた。」[4] 一方、"and very formidable in the practice of war" (Gould & Whiteley [42]), "und rauh in den Werken des Kriegs" (Plankl [1]) などの解釈もある。本稿では Lewis & Short 辞書の解釈に従っている。本稿と似た訳は、"voll grausamer Kriegslust" (Schröder [9]) など。

(12) サモス島はユーノーが誕生した島とされており、ユーノーを祭った神殿も現存し、古くからユーノー崇拝の中心地となっていた。

(13) タィバー (Tiber) は ティベリス (Tiberis ; 原詩は Tiberinus と形容詞形) の英語名。日本では、イタリア語名 Tevere にちなみ「テベレ河」として知られる。

(14) カーセッジ (Carthage) はカルターゴ (Karthago ; Carthago とも綴る) の英語名。

(15) タィァー (Tyre) はテュルス (Tyrus) の英語名。日本ではティルスとも呼ばれる。

(16) セィモスは サモス (Samos) の英語読み。

Vergilius, *Aeneis* (I. 19-28)

progeniem sed enim Troiano a sanguine duci
だが、トロイアの、血を引く子孫が、
audierat Tyrias olim quae uerteret arces;
いつしかテュルス人らの城砦を覆すであろうと、
ユーノーはすでに、聞き知っていた。
hinc populum late regem belloque superbum
すなわちその子孫から、王となって広く支配し、
戦争に誇りを持つ民が、
uenturum excidio Libyae; sic uoluere Parcas.
リビュアを滅ぼそうと現れるであろう。
こうパルカらが、運命の糸を紡いだのであった。
id metuens ueterisque memor Saturnia belli,
サートゥルヌスの娘は、これを恐れ、
古の戦争を忘れずにいた。
prima quod ad Troiam pro caris gesserat Argis —
愛しいアルゴス人に味方して、
トロイアで自身が先に、(17) しかけた戦争を。
necdum etiam causae irarum saeuique dolores
怒りの種も、激しい苦悩も、いまだ、
exciderant animo; manet alta mente repostum
心から消えていなかった。
心の奥底で積み重なって、(18) 留まり続ける、
iudicium Paridis spretaeque iniuria formae
パリスの審判と、美しい御姿が、軽視された侮辱と、
et genus inuisum et rapti Ganymedis honores:
憎らしい一族、そして、
さらわれたガニュメーデースへの栄誉が。

Wordsworth, *Aeneid* (I. 25-38)

But Fame had told her that a Race, from Troy
だが、噂で彼女が知ったのは、トロイから由来する民族が、
Derived, the Tyrian ramparts would destroy;
ティルス人らの、城砦を、破壊するであろうこと。(19)
That from this stock, a People, proud in war,
すなわち、この血筋から、
戦争に誇りを持った (20) ある民が、
And train'd to spread dominion wide and far,
支配を広く遠くへと、拡大すべく、鍛え上げられて、
Should come, and through her favorite Lybian State
やって来て、彼女が寵愛する、リビアの国中に、
Spread utter ruin: — such the doom of Fate.
完全な破滅が広がる、ということ。それが運命の定め。(21)
In fear of this, while busy thought recalls
このことを、恐れる一方で、何度も思い起こされるのは、
The war she raised against the Trojan Walls

彼女が、(22) トロイの城壁に対して、しかけた戦争、
For her lov'd Argos (and, with these combined,
自身が愛するアルゴスに味方して。
(そして、これらと組み合わさり、
Work'd other causes rankling in her mind,
他の原因も、彼女の心中で渦巻きつつ、悩ませていた。
The judgement given by Paris, and the slight
パリスによって、下された、審判と、
Her beauty had receiv'd on Ida's height,
アイダの高所で、(23)
彼女の美貌が僅かしか、評価されなかったこと、(24)
Th'undying hatred which the Race had bred,
その民族が引き起こした、消えることのない、憎しみ、(25)
And honours given to ravish'd Ganymed,)
そして、さらわれたガニュミードゥに、
与えられた名誉が。) (26)

注 釈

(17) "prima" に関する Gould & Whiteley [44] の解釈 "before" に従う。

(18) 逐語訳は、「蓄えられては」。Cf. Fairclough [243] "deep in her heart lie stored […]".

(19) 25-26 行については、ピット訳の語彙から多く借用されている (当該箇所のピット訳は、"But of a race she heard, that should destroy / The Tyrian tow'rs, a race deriv'd from Troy," (I. 26-27)). また、この箇所のワーズワスの訳は、「破壊する、損なう」という意味を二語に分けて用いているドライデン訳 ("That times to come should see the Trojan race / Her Carthage ruin, and her tow'rs deface;" [I. 29-30]) よりも逐語訳に近い。また、ワーズワスは語彙こそピットから多くを借用していても、語順については、ピットなどの先行訳よりもより原文に近づけている。例えば、"But Fame had told her" (Wordsworth, I. 25) 以下の that 節中の主語を、ピットは文末に倒置しているが、ワーズワスは原文通り、文頭に配置し直している。ここにも、既存の訳よりも原文に忠実に訳そうとしたワーズワスの配慮が見られる。

(20) "proud in war" (I. 27) の訳は、ピット訳 "proud in arms" (I. 28) と似ているが、ワーズワスが例えば本作品冒頭一行目の "arms" の訳語を "arma" に当てており、ここでは "bellum" を "war" と訳していることから、ワーズワスは「戦争」の訳し分けの際、原文の語彙に、より近づけた訳をしようとしていることが分かる。

(21) 原文 "Parcae" 「パルカたち (運命の三女神)」(I. 22) を、ドライデン (I. 33) もピット (I. 30) も "fate" と単数および小文字で訳しているが、ワーズワスのみ "Fate" (I. 30) と大文字で表記していることに、「運命」という語を訳す際に、ワーズワスは特別に留意していたことが看取されうる。この箇所の文中の配置も、ピットとは異なり、ワーズワスは原文と同じく行の後半に配置し、原文の語感の忠実な再現に努めている。

(22) "Saturnia" をワーズワス ("she" (I. 32)) をはじめ、ドライデン ("she" (I. 33)), ピット ("the goddess" (I. 32)) も、誰も逐語訳していない。ただし、ワーズワスのみ、I. 32 では訳さなかった "Saturnia" を、サートゥルヌス (サターン) の娘がジューノーであるということを分かりやすくするためか、I. 39 に "Saturnian Juno" を配置している。

(23) "on Ida's height" (I. 36) はワーズワスによる加筆。

(24) この箇所を、ピットはドライデンに倣い、"Her form disdain'd" (I. 36) と訳しており、この部分については例外的に、ワーズワスよりもドライデン訳の方が語数、文体とも原文に近い。また、三訳者とも "iniuria" (I. 27) を字義通りは訳していない。

(25) 原文の "et genus inuisum" (I. 28) の訳を、ワーズワスはここで行っているが、ドライデンは行っていない。また、ピットは "And last, the whole detested race of Troy" (I. 39) と訳を行ってはいるが、原文とは異なり、「憎らしい一族」と「さらわれたガニュメーデース」の訳の順を、原文とは逆にしている。他方、ワーズワスはこの点についても原文に忠実に訳している。

(26) ドライデンは、この後さらに "Electra's glories, and her injur'd bed. / Each was a cause alone;" (I. 41-42) と原文にはないジューノーの苦悩の種の内容を説明的に加筆する。また、ピットは "rapti Ganymedis" (I. 28) の訳を、"of the ravish'd boy" (I. 38) と次の文末の "Troy" との韻を踏むため、ガニュメーデースの名を訳していない。これに反し、ドライデンやワーズワスは原文のガニュメーデースの名を残しながらも、韻を踏むことにも成功している (ドライデン：Ganymed / bed (I. 40-41), ワーズワス：bred / Ganymed (I. 37-38)).

Vergilius, *Aeneis* (I. 29-33)

his accensa super iactatos aequore toto
女神の心は、これらのことに一層燃え立ち、
トロイア人らを海原の至る所に、(27)
Troas, reliquias Danaum atque immitis Achilli,
放り出し、ダナイー勢と非情なアキッレースから逃れて、
生き残った者たちを、
arcebat longe Latio, multosque per annos
ラティウムから遥か彼方に、遠ざけようとした。

幾多の年月に渡り、
errabant acti fatis maria omnia circum.
運命によって追い立てられ、あらゆる海中を巡って、
彷徨った。
tantae molis erat Romanam condere gentem.
ローマ民族の礎を築くことには、かくも大きな、
艱難辛苦があった。

Wordsworth, *Aeneid* (I. 39-44)

Saturnian Juno far from Latium chaced
サターンの娘、ジューノーは、
レィシァムからはるか遠くへと、
The Trojans, tossed upon the watery waste;
トロイ人らを追い払い、荒れた海原へ、放り出した。
Unhappy relics of the Grecian spear
ギリシア軍の槍と、恐ろしいアキリーズ (28) から、
逃れ残った、(29)
And of the dire Achilles! Many a year
不幸な者たちを。幾多の、年月に渡り、(30)
They roam'd ere Fate's decision was fulfill'd;
運命の定めが、成就するまで、彼らは彷徨った。(31)
Such arduous toil it was the Roman State to build.
ローマ国家を建設することは、かくも骨の折れる、
難業であった。(32)

注 釈

(27) Gould & Whiteley の解釈 "in every (quarter of) the sea" [46] に従う。

(28) "Danaum atque immitis Achilli," (I. 30) について、ドライデンは "of the Trojan host" (I. 45) と内容に基づいて訳し、ピットも "of the Grecian war" (I. 41) と "Danaum" (I. 30) は訳すが、他は内容から訳しているのに対し、ワーズワスだけが "of the Grecian spear / And of the dire Achilles!" (I. 41-42) とアキッレースも省略せず、原文に極力忠実に訳している。

(29) "relics" (I. 41) に相応するドライデンの訳は、"the remnants" (I. 45) で、「遺物」や「残存物」といった物体を表す "relics" よりは、人を表す "the remnants" の方が、原文 "relinquiae" (I. 30) の訳に近い。ワーズワスは原文の音感を残そうとして訳に "relics" を採用したのであろう。ただし、この訳語はピットも使っている "She drove the relics of the Grecian war: " (I. 41).

(30) 原文の "multosque per annos" (I. 31) をドライデンは "And sev'n long years" (I. 46) と原文とは変えて、具体的な期間を加筆している。ピットは "long" (I. 42) と簡潔に訳す一方で、ワーズワスは先訳と比して、語数など形式的にも内容的にも逐語訳をしている。

(31) 原文の "acti fatis" (I. 32) の「運命」をドライデンは訳出していないため、ドライデンは、運命の存在を他の訳者よりは、あまり大きくとらえていなかったと推測される。ドライデンは、トロイア人らが "th' unhappy wand'ring train / Were toss'd by storms," (I. 46-47) と、「運命」ではなく、「嵐」によって追い立てられたと訳し、原文の意味に沿って訳したピットの "Fate urg'd their course;" (I. 42) とは対照的である。原文も、ピットも、トロイア人らを突き動かし、駆り立てるのは運命という解釈をしている。ワーズワスは "ere Fate's decision was fulfill'd" (I. 43) と、トロイア人らが何らかの行動を起こす前に、彼らの運命があたかも先に決まってしまっているかのような描写をしている。また、ワーズワスはこの箇所でも「運命」を大文字で表記している。このことから、ワーズワスが「運命」を他の訳者や作家たちよりも強調して描いていることが読み取れる。このように翻訳部分だけを見ても、訳者の思想や解釈の違いが表れている。

(32) "tantae molis erat Romanam condere gentem." (I. 33) と一行にまとめられている原文を、ドライデンもピットも二行に渡って訳しているが (ドライデン訳 "Such time, such toil, requir'd the Roman name, / Such length of labor for so vast a frame" (I. 48-49) とピット訳 "So vast the work to build the mighty frame, / And raise the glories of the Roman name!" (I. 44-45)) ワーズワスは原文通り一行にまとめており、この一文に込められた重々しさを表現するのに成功している。その際、ワーズワスはただ一文にまとめただけではなく、構文 (補語、動詞、主語の順や不定法を残した訳など) や語彙 (例えば "Romana gens" (I. 33)) の訳を、ドライデン (I. 48) もピット (I. 45) も "Roman name" に変えている一方で、ワーズワスは "the Roman State" (I. 44) と表すなど、意味内容だけでなく、語順や構文も原文に忠実に沿っていることが分かる。ドライデンやピット訳に見られるような英詩のリズム感やテンポなどを多少犠牲にしてでも、ワーズワスの場合は忠実な訳を試みている。特に、ドライデンが原文には一度しか用いられない "tantae" (I. 33) を "such" (I. 44) を三回も繰り返して訳すことで、躍動的なリズムを生み出すと同時に、ローマ建国に至るまでの労苦の大きさを強調しているのとは対照的である。

ここでも、ワーズワスの翻訳詩は、彼自身の創作というわけではなく、あくまでウェルギリウスを原語ではなく英語という自身の母国語で読む体験を再

現するために、原文に忠実に訳そうとした姿勢が看取されうる。

Vergilius, *Aeneis* (I. 34-41)

Vix e conspectu Siculae telluris in altum
シキリアの地が、視界から消えかけると、
トロイア人らは沖に向かい、
uela dabant laeti et spumas salis aere ruebant,
喜びに満ちて帆を張り、海水の泡を青銅の舳先で、(33)
切り分け進んだ。
cum Iuno aeternum seruans sub pectore uulnus
ユーノーは、永遠に癒えぬ傷を、胸に抱きつつ、
haec secum: 'mene incepto desistere uictam
心中こう呟いた。「私は負かされてしまって、
わが企てを諦めるのか。
nec posse Italia Teucrorum auertere regem!
またテウケルの子孫どもの王を、
イータリアから、追い払うことができないのか。
quippe uetor fatis. Pallasne exurere classem
確かに私は運命に妨げられている。
パッラスは、アルゴス人らの艦隊を焼き尽くし、
Argiuum atque ipsos potuit summergere ponto
彼らの身を、海に沈めることが、できたではないか。
unius ob noxam et furias Aiacis Oilei?
それはたった一人の罪、オイーレウスの子、
アイアクスの狂乱ゆえではなかったのか。

Wordsworth, *Aeneid* (I. 45-56) (34)

Sicilian headlands scarcely out of sight,
シシリーの岬が、ようやく、視界から消えかけ、(35)
They spread the canvas with a fresh delight;
彼らは、喜び勇んで、帆を広げた。(36)
Then Juno, brooding o'er the eternal wound,
その時ジューノーは、永遠に癒えぬ傷を、
胸に抱きつつ、
Thus inly; — "Must I vanquish'd quit the ground
心中こう呟いた。(37)「私は負けてしまって、
わが企ての、
"Of my attempt? Or impotently toil
根本を諦めるのか。あるいは、虚しく骨折っているのか、
"To bar the Trojans from the Italian soil?
トロイ人どもを、(38) イタリアの地から、
追い払おうと。(39)
"For the Fates thwart me; — yet could Pallas raise
というのも、運命が私を妨げているのだ。(40)
だがパラスは、(41)
" 'Mid Argive vessels a destructive blaze,
アルゴス人の、艦隊の只中で、破壊的な火災を起こし、
"And in the Deep plunge all, for fault of one,
そして深海に、すべてを沈めることが、できたではないか。
しかも、それは、たった一人の罪、
"The desperate frenzy of Oïleus' Son;
オイレアスの息子の、向こう見ずな、
狂乱ゆえのことであった。(42)

注 釈

(33) Gould & Whiteley [46] による "aere" の注釈 "with bronze-sheathed" に従う。

(34) ワーズワス訳 45-56 行では、"spumas salis aere ruebant" (I. 35) が訳されていない以外は、構文や内容、文の切れ目に至るまで、原文にかなり忠実に訳されている。ちなみに、この箇所は、ドライデンも "And plowing frothy furrows in the main" (I. 53), ピットも "and plough'd the foamy main" (I. 47) と訳し落としはしていない。

(35) この箇所のピット訳は、"Scarce from Sicilian shores the shouting train" (I. 46) と S で韻を踏んでいる。この先行訳を踏襲してか、ワーズワスも同様にこの行を S で頭韻を踏み、場面の変化の様子を印象付けている。なお、「シシリー」"Sicily" はシチリアの英語名。

(36) 原文では I. 34-35 と二行しかないが、ドライデンは二倍の長さの四行に渡り訳している。また、原文の副詞句 "Vix e conspectu Siculae telluris" (I. 34) を、ドライデンは構文を変え、"Now scarce the Trojan fleet, with sails and oars, / Had left behind the fair Sicilian shores," (I. 50-51) と完全文にして訳している。原文にない "the Trojan fleet" を説明的に付加し、"vela dabant" (I. 35) を "with sails and oars" と副詞句に変えている。また、"Ent'ring […] the wat'ry reign," (I. 52) もドライデンによる加筆部分である。これに対し、"spumas salis aere ruebant," (I. 35) を訳出していないワーズワスとも異なり、ピット訳は "Scaece from Sicilian shores the shouting train / Spread their broad sails, and plough'd the foamy main; " (I. 46-47) と、語順も構文も文体も行数も、かなり原文に近づけている。 ので、ワーズワス訳にも必ずしも逐語訳ではない箇所も見られる。

(37) ドライデン訳 ("When, lab'ring still with endless discontent, / The Queen of Heav'n did thus her fury vent:" (I. 73-74)), ピット訳 ("When haughty Juno thus her rage exprest; / Th' eternal wound still rankling in her breast." (I. 48-49)) と比してワーズワスが最も原文に忠実に訳している。まず、ドライデンは "Iuno" (I. 36) を "The

Queen of Heav'n" と、ピットは "haughty Juno" と、"haughty" を加筆した上、"secum" (I. 37) の訳も省略し、文の主語を原文の "Iuno" から "Th' eternal wound" に変更している。

このように、"haec secum"「心中、こう (呟いた)」(I. 37) を、ドライデン "The Queen of Heav'n did thus her fury vent:" (I. 55) とピット "When haughty Juno thus her rage exprest;" (I. 48) がより劇的に脚色して、ジューノーが激しく感情を吐露するさまの描写に力点を置いて、原作よりも一層緊迫した場面を描き出しているのに対し、ワーズワスはあくまでも原文の表現を英語で再現すべく原文に忠実な逐語訳に努めていることがこの箇所からも分かる。

(38) 原文は「テウケルの子孫ども」で、テウケルはトロイア王家の祖とされるが、ワーズワスは古典の素養のない市井の読者にも分かりやすいよう、ドライデン同様に「トロイ人ども」と表す。

(39) ワーズワス訳では、"regem" (I. 38) の訳こそ省かれているものの、それ以外は原文に最も忠実に訳されている。ドライデン "And must the Trojans reign in Italy?" (I. 57) もピット "And must this Trojan prince in Latium reign?" (I. 51) も、「トロイの王子がイタリアにいるしかないのか」という表現に変更している。この点からも、ワーズワスが先訳に囚われず自らの追及する逐語訳に努めようとしていることが分かる。

(40) この51行でも、ワーズワスは「運命」を "the Fates" と大文字で表している。ドライデン訳も大文字であるが、内容については "So Fate will have it, and Jove adds his force" (I. 77) と「私が運命によって妨げられている」のではなく、「運命がそれを行い、ジョウブが力添えをする」と、運命を文の主語にして擬人化したうえ、自身の運命に関する解釈を加えて新たな内容の詩文を創作する。そして、原文にはない、" Nor can my pow'er divert their happy cource. " (I. 78) の一文を加筆する。また、ピット訳 "Belike, the fates may baffle Juno's aims;" (I. 52) でも、ドライデン訳と同じく、主語が「私」ではなく「運命」に変えられており、「運命がジューノーの狙いを挫くかもしれない」と、運命の存在を原文よりも強く表している。この場合、先行訳と比して、ワーズワス訳が原文に一層忠実である。

(41) Pallas の怒れるさまを強調すべく、ドライデンは、"angry Pallas, with revengeful spleen" (I. 60) と原文にない内容を訳し足している。また、ピットも "Pallas, with avenging flames" (I. 53) とドライデンに従った如くの訳を行っている。この二人と比べると、ワーズワスの方が省略も加筆もほぼなく、原文に最も沿って訳している。

(42) "unius ob noxam et furias Aiacis Oilei? " の "Aiax Oileus" をドライデンは訳さず ("foe" に変える、cf. I. 62) ピットは "for the crime of Ajax" (I. 56) と "Oileus" の訳を省略している。反対に、ワーズワスは "Aiax" の訳を省いている。三者三様の訳であるが、ドライデンとワーズワスの場合、ヒロイック・カプレットの脚韻を作るためにこのように変更したと推測される。

Vergilius, *Aeneis* (I. 42-49)

ipsa Iouis rapidum iaculata e nubibus ignem
あの女神は自ら、ユッピテルによる轟速の雷火を、
雲間から放って、
disiecitque rates euertitque aequora uentis,
船団を追い散らし、海面を、疾風で覆した。
illum exspirantem transfixo pectore flammas
胸を貫かれて、火炎を吐き出している、あの男を、
turbine corripuit scopuloque infixit acuto;
旋風でかっさらい、鋭く尖った岩に、打ち付けてしまった。
ast ego, quae diuum incedo regina Iouisque
それに引き換え、神々の女王にして、ユッピテルの、
et soror et coniunx, una cum gente tot annos
女きょうだい (43) でもあり妻でもあるこの私は、
たった一つの民族と、これほど多年に渡り、
bella gero. et quisquam numen Iunonis adorat
戦い続けている。これでは誰が、ユーノーの神威を崇め、
praeterea aut supplex aris imponet honorem?'
この先、祭壇に跪き(ひざまずき)、供物を供えてくれようか。

Wordsworth, *Aeneid* (I. 57-63) (44)

"*She* from the clouds the bolt of Jove might cast,
彼女は、雲間から、ジョウブの雷光を放ち、(45)
"And ships and sea deliver to the blast!
船団と海を、突風に、ゆだねる。
"Him, flames ejecting form a bosom fraught
業火に満ちた胸から、火炎を吐き出している、彼を、(46)
"With sulphurous fire, she in a whirlwind caught,
彼女は、旋風で、かっさらい、
"And on a sharp rock fix'd; — but I who move
鋭く尖った岩に、固定した。(47) けれども、
"Heaven's Queen, the Sister and the Wife of Jove,
天の女王として振る舞う身であり、
ジョウブの女きょうだいで、妻でもあるこの私が、
"Wage with one Race the war I waged of yore!
たった一つの民族と、昔に私が仕掛けた戦争を、
いまだ続けている。(48)

“Who then, henceforth, will Juno’s name adore?
これでは、誰がこの先、ジューノーの名を崇めようか。(49)
“Her altars grace with gifts, her aid implore?”
彼女の祭壇を、供物で飾り、
彼女の加護を嘆願するであろうか。(50)

注 釈

(43) Juno は Jupiter (Juppiter) の姉という説が一般的には有力であるが、念のためここでは「女きょうだい」と訳しておく。

(44) 原文 1. 57-63 の計 8 行は、ドライデン (13 行) やピット訳 (14 行) の行数と比べ、ワーズワス (9 行) がもっとも原文の行数に近い。ドライデンやピットは、この箇所を原文にかなり加筆してそれぞれ創造的に描写している。

(45) “ipsa” の訳としてドライデンは、“The bolts of Jove himself presum’d to throw” (I. 63) と「ジョゥブ自身の」と訳しているが、原文は「女神自らが」を指すので、ドライデン訳は正確であるとは言い難い。

(46) この箇所について、ドライデンは、“Then, as an eagle gripes the trembling game,” (I. 66)「鷲が震える獲物を掴むかのように」と原文には全く無い比喩を追加して、原文で描写される場の緊迫感を一層高めて描き、脚色している。ここにも、戦闘や格闘といった猛々しいシーンを描くことを得意としたドライデンの詩的特色がみられる。

(47) ワーズワス 1. 59-61 の部分は、ドライデンやピットと比べると原文に忠実な語順、内容で訳されており、ほぼ加筆も省略もない。一方、ドライデンはこの部分を原文の二倍の行数を使って、原文では短文で描写されている小アイアクスが無残にもユーノーに捕らえられる様子を、彼自身の表現を付加して一層劇的に表現している。“The wretch, yet hissing with her father’s flame, / She strongly seiz’d, and with a burning wound / Transfix’d, and naked, on a rock she bound” (I. 67-69) と、例えば「その男」に “wretch” を付け加えて、男の哀れさを強調したり、原文にない “strongly” も付加して、女神が小アイアクスを強引に捕らえる様子をより激しく表現する。そして “and naked” も原文にはなく、ドライデンの創作である。ドライデンはこのような残忍な場面を、原文よりもリアルに想像できるよう、原文の内容から多少離れてでも強調し、より残酷に脚色して再現する。ここにも、ドライデンの翻訳法の特性が垣間見られる。

(48) この箇所をワーズワスは加筆も削除もせず、原文を忠実に訳すことに尽力する一方で、ドライデンは、“For length of years my fruitless force employ / Against the thin remains of ruin’d Troy!” (I. 72-73)「長年に渡り、(ジューノーは) 滅亡したトロイの僅かな残党に対して、虚しく武力を行使している」と説明的に訳す。特に、“una cum gente”「たった一つの民族と」の訳を比較すると、ピット (“With this one nation”) やワーズワスは逐語訳する一方で、ドライデンは、“Against the thin remains of ruin’d Troy!” と物語を説明するような創作的な訳をしている。この箇所からも、ドライデンが戦争の場面の描写に一層力を入れていることが分かる。

(49) “numen Iunonis” をドライデンは “Juno’s Power,” ピットは “my name” と訳しており、ワーズワスはこの箇所の訳をピットに倣っている。この箇所は例外的にドライデンが一番原文に近い訳をしている。

(50) この行をドライデンもピットも逐語訳をせず、三者三様に訳している。ドライデンは、“Or off’rings on my slightes altars lay?” (I. 75)「あるいは、私の等閑にされた祭壇に、供物を置いてくれるだろうか」、と「(祭壇に) 跪き」を省略し、ピットは “Adore my pow’r, or bid my altars flame?” (I. 69)「私の力を崇め、私の祭壇の火を貰おうとするだろうか」と、原文にはない「祭壇の火」を、ワーズワスの場合、“her aid”「彼女の加護」を加筆する。さらに、ドライデンとピットは、ユーノーの独白部分であるので、“altars” や “pow’r” に所有格 “my” を付けているが、ワーズワスのみ “her” と三人称に変えて話者ジューノーの視点ではなく、ジューノーが自身を客観視して述べる形に変えている。ただし、原文も話者ユーノーが自身を客観的に見て述べている形になっているので、ワーズワス訳における “her” の付加が原文の意味から離れるということにはならない。

[抄訳および注釈終わり]

III. 結　語

以上の和訳および注釈における分析を最後に要約すると、特に戦場での描写に詩人としての創造性や個性を発揮し、ウェルギリウスの原文に現れる戦場の場面が、あたかも眼前に現れるように生き生きと描写することに努めたドライデンに比べ、またドライデンの影響を多少なりとも受けながらも、ドライデンよりは原文に近づけて訳そうとしたピットにも比べ、ワーズワス自身が明言しているように、原文の文構造や語彙、行数、内容を、原文に極力忠実に英語で再現しようとしたワーズワスの尽力が、ワーズワスの『アエネーイス』英訳文から見て取ることができる。ワーズワスは、『アエネーイス』原典の世界観を、原典に忠実に、しかし別の言語で、ラテン語とは異なる英語で再現しようとした。すなわちラテン語で原典を読む体験と感動を、英語でも味わえるよう尽力した。

しかしながら、ウェルギリウス作品の翻訳が盛んに行わ

れた新古典主義の時代が過ぎ去って久しい中、よりにもよってワーズワスが、かなりの熱意を持って先人達よりも原文に忠実な翻訳を試みようとしたことは、ロマン派の盟友コールリッジならずとも、意外に思わざるをえない。自らの宣言通り、日々の生活を営む中で内面から湧き上がる自然な感情のほとばしりを平易な言葉で紡ぐ詩作[9]を本領としてきたワーズワスが、それとは真逆に見える古典の壮大な叙事詩の翻訳を手掛けた背景には、停滞の中に新境地を開拓するという望みも垣間見える一方、内容と形式の両面でかつてないほど忠実な翻訳詩を目指すというこの試みは、結局は自らをがんじがらめに縛り付けることになる諸刃の剣であったことは明らかである。けれども、この推敲と苦闘の中になお、ワーズワスのウェルギリウス作品への憧憬や、詩人としての彼の限界のみならず才能や個性が見て取れる。その意味でも考察に値する作品といえよう。

後　注

1　ワーズワスの訳詩には以下の前書きが付されている。「この翻訳の最初の二行連句は、ピットから借用したことを前置きしておくことが適切である。第2巻の二つの二行連句も同様である。また、別の箇所で3，4行を、ドライデンから拝借した。原文に忠実に従うと、どうしても先行翻訳者たちが用いたものとほとんど同じになってしまう表現もいくつか見出されるであろう。」(“Translation of *Aeneid*” [181])

2　ワーズワスは折に触れて、先行訳 (特にドライデン訳) が、ウェルギリウスの原詩の良さを損なってしまっていることに言及しており、第1巻完成後にも「ドライデンや、彼よりもずっと原文に近づけようとしたピットよりもさらに逐語的 “literal” であろうと努力した」と書簡に綴っている (*Letters* IV [228])。

3　ワーズワスから『アエネーイス』の翻訳原稿を読んで欲しいと頼まれたコールリッジは、「ミルトン以来、君ほど多くの名文と忘れがたい詩行や節を持つ詩人を、私は一人も知らないというのに […] 身を落として (翻訳) 作業に時間を浪費したことにいらだちを覚える」という辛辣な感想を書き送っている (1824年4月12日付書簡、Appendix II [571])。新古典主義隆盛の頃には盛んに行われたウェルギリウス作品の翻訳が、もはや詩的自己否定とみなされるようになり、自らの詩作の熟達に自負のある詩人が試みることは殆どなくなったという時代状況 (Burrow [33]) を鑑みれば、敬愛するワーズワスが翻訳に乗り出したことに対するコールリッジの反応は、きわめて自然なものといえよう。

　一方で、コールリッジは甚だ不本意ながらも、原稿を細かに添削してコメントを書き添えており、その内容は、この著名な二人の詩人の詩作に対する考え方を示す貴重な資料となっている。

4　ワーズワスが『アエネーイス』翻訳に着手したのは1823年晩夏とされているが、6ヵ月間詩作に没頭し、次の巻へ進むことを断念した後も、8年もの歳月をかけて定期的に改訂を続けたという (Graver, Introduction [155-156])。

5　ドライデン訳 (初版 1697 年)、ピット訳 (初版 1728-1740 年) はワーズワスが所有していた版が特定されておらず、本稿では、彼が読んだであろうことが判明している時期 (Wu [140-142]) あたりに流布していた1780年版と1778年版を底本とし、巻数と行数を表示する。ワーズワスは、他にオゥグルビー (John Ogliby, 1600-1676 年) やトラップ (Joseph Trapp, 1679-1748 年) の英訳からも少なからず影響を受けており、後者二人の訳詩については、『チョーサーとヴァージルの翻訳』に付された借用に関する詳注 (Editor’s Notes) の原文で検討を行う (トラップ訳は1718年から1720年にロンドンで出版された二巻本、オゥグルビー訳はワーズワス自身が所有していた1650年版が用いられており、後者は行数が打たれていないため頁数での表示となっている)。

6　ラテン原文の翻訳に当たっては、英訳との対比を本論の主目的とするため、なるべく逐語訳を心掛けた。参照した翻訳は、邦訳は、岡道男・高橋宏幸訳『アエネーイス』西洋古典叢書、京都大学学術出版会、2001年の他、泉井久之助訳『アエネーイス』岩波文庫、1巻、1976年。田中秀央・木村滿三譯、ウェルギリウス著『アエネーイス』上、岩波書店、1940 年を参考とした。さらに、欧文訳は、Vergil. *Aeneis, Lateinisch-Deutsch*, In Zusammenarbeit mit Maria Götte, herausgegeben und übersetzt von Johannes Götte, mit einem Nachwort von Bernhard Kytzler. München und Zürich: Artemis Verlag, 7. Auflage, 1988. (Sammlung Tusculum). Vergil. *Aeneis 12 Gesände. Unter Verwendung der Übersetzung Ludwig Neuffers übersetzt und herausgegeben von Wilhelm Plankl unter Mitwirkung von Karl Vretska.* Stuttgart: Philipp Reclam, 1976. Vergil. *Aeneis, Lateinisch und Deutsch, eingeleitet und übersetzt von August Vezin,* Münster: Aschendorf Münster, 2000. Vergil. *Werke in einem Band. Kleine Gedichte・Hirtengedicte Lied von Landbau, Lied von Helden Aeneis.* Berlin und Weimar: Aufbau-Verlag, 1987. Vergil. *Aeneis. Aus dem Lateinischen von Rudolf Alexander Schröder mit Miniaturen aus dem Codex Vergilius Vaticanus.* Frankfurt am Main: Insel Verlag, etst. Auflage 1991. 以上のドイツ訳の他、Virgil. *Eclogues, Georgics, Aeneid 1-6*, Translated by H. R. Fairclough. Cambridge: Harvard

University Press, reprinted 1994. (The Loeb Classical Library, 63) を参考にした。

7　この態度をどう評価するかということは、ワーズワスの『アエネーイス』翻訳の試みに対する賛否を左右する大きな要因の一つとなっている。ウェルギリウスの美文のリズムの効果を捉えることに成功したと評価する向きもあれば (Spiegelman [103])、コールリッジのように、"Latinism" (ラテン語的語法・表現) をラテン語に合わせ過ぎた "unenglishism" (英語ではない語法・表現, *Marginalia* IV [205]) と嫌う向きもあり、後者の場合は、翻訳詩の出来栄え云々よりも、まずワーズワスがこのような試みに手を出すことが失敗という結論に至ることになる。

8　Geoffrey Chaucer (c.1343-1400 年) や William Caxton (c.1422-1491 年) など、『アエネーイス』の英訳を発表した初期の文学者たちは、後世の基準で言えば「翻案」と呼んだ方がよいような形で、内容的にも形式的にも比較的自由に自らの詩行を走らせたのに対し、次第に、いかに正確に古典詩を英詩に移し替えるかということに重点が置かれるようになったが、長短短六歩格の古典詩を、語彙的にも統語的にも性質の違う英語という言語でそのまま再現することは不可能に近く、様々な韻律が試された。例えば 16 世紀の『アエネーイス』翻訳詩においては、弱強五歩格 (Gavin Douglas, 1553 年)、無韻詩 (Henry Howard, 1557 年)、十四音節詩句 (Phaer and Twyne, 1573 年) といった英詩的韻律を用いての表現の模索に加え、古典詩と同様に母音の長短を詩脚の基礎とした音量詩の六歩格 (Richard Stanyhurst, 1582 年) での翻訳が試みられている (Løsnes [20])。中でも、Thomas Phaer が着手した訳を Thomas Twayne が完成させた本は 17 世紀まで重版を重ね、後にピット訳が一世紀近くのロングセラーを続けるまでは、最も長く読まれた訳であった (Lally [xii])。

9　ロマン派の新時代を開いたとされるワーズワスとコールリッジの共著『抒情歌謡集』(*Lyrical Ballads*) の第二版にワーズワスがつけた長い序文 (1800 年発表、1802 年の第三版で加筆) において、詩とは「力強い感情がおのずからあふれでたもの」("the spontaneous overflow of powerful feelings") (*Lyrical Ballads* [756]) であるべきであり、日常の生活を平易な言葉で表現するものであるという持論を述べている。

References

Primary Sources :

Dryden, John.　*Æneid.* Vol. 2 *of Works Containing His Pastorals, Georgics and Aeneis*. 1-6 vols. London, 1780.

---. "Preface to Ovid's Epistles."　Vol. 1 of *The Poems of John Dryden*.　5 vols.　Ed. Paul Hammond.　New York: Routledge, 2014.　376-391.

Pitt, Christopher.　*The Æneid.* Vol. 2 of *The Works of Virgil in Latin and English*. 3rd ed. 4 vols. London, 1778.

Vergilius Maro, Publius.　*P. Vergili Maronis opera, recognovit breviqve adnotatione critica instrvxit*.　Ed. R. A. B. Mynors.　Scriptorum classicorum bibliotheca Oxoniensis. Bristol: Oxford UP, 1969.

Wordsworth, William.　*Lyrical Ballads, and Other Poems 1797-1800*.　Ed. James Butler and Karen Green.　The Cornel Wordsworth.　Ithaca: Cornell UP, 1992.

-----. "Translation of Virgil's *Aeneid*."　*Translations of Chaucer and Virgil.*　Ed. Bruce E. Graver.　The Cornel Wordsworth.　Ithaca: Cornell UP, 1998. 181-271.

-----. *The Letters of William and Dorothy Wordsworth: The Later Years, 1821-1850.*　Ed. Ernest de Selincourt.　2nd ed.　Rev. Allan G. Hill.　4 vols.　Oxford: Clarendon Press, 1978.

Secondary Sources :

Anderson, William S.　*The Art of the Aeneid*.　1969.　2nd ed. Mundelein, Illinois: Bolchazy-Carducci Publishers, 2005.

Austin, R. G.　*P. Vergili Maronis Aeneidos. Liber primus. With a commentary by R.G. Austin.*　Oxford: Clarendon Press, reprinted 1990.

Burrow, Colin.　"Virgil in English Translation."　*The Cambridge Companion to Virgil*.　Ed. Charles Martindale.　Cambridge: Cambridge UP, 1997.　21-37.

Coleridge, Samuel.　Appendix II: Coleridge's Note. Wordsworth, *Translations of Chaucer and Virgil* 569-571.

-----. *Marginalia IV: Valckenaer to Zwick.*　Ed. H. J. Jackson, and George Whalley.　*Vol. 12 of The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge*.　Princeton: Princeton UP, 2001.

Farrell, Joseph, and Michael C. J. Putnam, eds.　*A Companion to Vergil's Aeneid and Its Tradition*.　Wiley-Blackwell: Chichester, 2010.

Garrison, James D.　*Pietas from Vergil to Dryden.* University Park, PA: Pennsylvania State UP, 1992.

Gould H.E. and Whiteley, J.L.　*Vergil, Aeneid I, edited with Introduction, Notes and Vocabulary*.　Bristol, 1946.

Graver, Bruce E.　Editor's Notes.　Wordsworth, *Translations of Chaucer and Virgil*.　Ithaca: Cornell University Press, 273-289.

-----.　Introduction.　Wordsworth, *Translations of Chaucer*

and Virgil. 155-174.

-----. "Wordsworth and the Language of Epic: The Translation of the *Aeneid*." *Studies in Philology* 83 (1986): 261-285.

Lally, Steven, ed. *The* Aeneid *of Thomas Phaer and Thomas Twyne: A Critical Edition Introducing Renaissance Metrical Typography.* Volume 20 : The Renaissance Imagination. London: Garland, 1987.

Løsnes, Arvid. *"Arms and the man I sing…": A Preface to Dryden's Aeneid.* Newark: U of Delaware P, 2011.

Maclennan, Keith. Notes on the Text. *Virgil: Aeneid I.* London: Bristol Classical Press, 2010. 77-162.

Ruæus, Carolus. *P. Virgilii Maronis opera interpretatione et notis illustravit Carolus Rucæus ad usum serenissimi Delphini*. London, 1817.

Spiegelman, Willard. "Wordsworth's *Aeneid*." *Comparative Literature* 26.2 (1974): 97-109. Oxford: Oxford UP, 2008.

Wu, Duncan. *Wordsworth's Reading 1770-1799.* Cambridge: Cambridge UP, 1993.